

北  
京

峰



正月号

第5卷 第1号

通卷 第32号

# 目 次 ————— 正 月 号 —

卷頭の言葉  
神々を指導する人々

自我傳講義へ久遠の本仏と人間釈尊▽第十二回

本仏釈尊と多宝如来

身延山三門二王尊の靈威へその二▽

日高白象

分銅志静

信仰相談室

唱題の心得とは

日高白象

鷲峰贊助会員御芳名

新年の御挨拶

13

編集後記

37 83

表紙題字・身延山法主藤井日靜院下  
表紙写真・インド靈鷲  
身延山金

像

# 人々する指導

一般的に宗教といえば、神の心において、或は神の業（わざ）において、人々を指導し救済するものとみなされています。人々は神々を敬い、神々を恐れおののきながら、神々の愛の恵みを願い、神々の心にかなうべく奉仕しています。そこには神々に対して隸属することはあるつても、神々を指導するということはありません。いやそういうことは神々を冒瀆するものとして全く考えもされないことでしよう。

ところが仏陀釈尊は、その名称に應供・正徳知・明行足・善逝・世間解・無上士・調御丈夫・天人師、仏・世尊という如来の十号があるように、まさしく「天・人の師」として天界（神々の世界）と人界（人間の世界）における最高の指導者であられたのです。事実釈尊八十年の伝記をひもとけば、天地の神々を敬い供養するだけでなく、攝取・折伏よろしきに従つて神々をも指導されています。

釈尊の血脉に生きた日蓮大聖人もまた、本化上行菩薩の再誕という自覚のもとに、神々を諫曉されたことは再参ではありませんでした。たとえば文永八年九月十二日、竜ノ口の刑場へ赴かれる途中、鎌倉八幡宮の社頭において「如何に八幡大菩薩まことの神か」と國

# 神々をも

卷頭の言葉

神さえも諫曉されており、また文永十一年の春、蒙古襲来の国難逼迫するや、大聖人の佐渡流罪を、未だ赦免へ運ばざる神々に対しても諫曉を加えられています。それは天地の神々が靈山虚空会上、本仏釈尊に対して法華經の行者擁護を誓願すると共に、善神は正法を家とし、正法を食として威光を増益する、という確信を堅持されたいたからです。

天地の神々をはじめ、すべての人々を敬い、人々を慈愛するのみならず神々をも指導するということ、それは何と素晴らしい境地でしょう。然しこのことは、法華經を如説に実践する本化地涌の菩薩にして、はじめて可能なことなのです。宗門では、このような人々を「人天の大導師」と称し、みずから此の誇りを堅持していた人々は決して少くはありませんでした。然るに何時の間にか、宗門人の心底には、かゝる高邁なる信念は喪失して、在俗の権力、財力に迎合屈従し、果ては低俗なる信仰にまでも墮落して、今日に至つています。宗門の復興は、宗門人の一人一人が國家開拓を眼目として、神々をも指導する「人天の大導師」たる自覚にめざめ、如説に法華一乘の仏道を、修証して行くことより始まらなければなりません。

# 本仏釈尊と多宝如來

日 高 白 象



20

至るまでの虚空会（靈鷲山の上空の、空中と  
虚空における説法会）

さて法華經二十八品は、説法の依處に約して「二処 第三座 第二十三章の藥王菩薩本事品から第二十八章  
三会」という構成のもとに組織されているといわれて  
います。「二処三会」というのは、

第一座 第一章の序品第一から第十章の法師品に至る  
までの最初の靈山会（靈鷲山の山頂における  
(二処)における三度の説法会（三会）として分けら  
説法会）

第二座 第十章の見宝塔品から第二十二章の囁累品に

ところが、これに対して中国の天台大師は、説法の

内容を中心として、

迹門 第一章の序品から第十四章の安樂行品まで

本門 第十五章の従地涌出品から第二十八章の普賢菩薩勸發品まで

薩勸發品まで

というように法華經全体を、本門と迹門に分けています。

次に、この二種の分類を照しあわせて図示すれば、

—第一章 序品

—前の靈山会

第十章 法師品

第十一章 見宝塔品

—虚空会

第十四章 安樂行品

—従地涌出品

—虚空会

第二十二章 嘴累品

第二十三章 祈王菩薩本事品

—後の靈山会

第二十八章 普賢菩薩勸發品

というようになり、同じ虚空会ではあっても、迹門の虚空会 第十章の見宝塔から第十四章の安樂行品まで

本門の虚空会 第十五章の従地涌出品から第二十二章の囑累品まで

本門の虚空会 第十章の見宝塔から第十四章の安樂行品まで

といふ「二種の虚空会」があることが明かになつて来ます。

蓋し、迹門の虚空会は、梵文に照しあわせてみても実は単なる空中会であつて、眞の虚空会ではなく、眞の虚空会は、本門に入り、第十五章の従地涌出品において、久遠劫來、久遠の本仏の直弟子であつた、六万恒河沙の地涌の菩薩団が、大地の下の虚空界より、大地を割つて涌出したことから展開されるのです。

そこで厳密にいえば法華經は、迹門の虚空会（空中会）と、本門上空の虚空会と、本門地下の虚空会といふ、「三つの虚空会」が説かれている、ということも出来ましょう。

蓋し、ここで注意しておかなければならないことは虚空会の内容に、如何に本迹の相違はあつたとしても多宝塔中における二仏並座の儀相そのものには、何ら変りはないということです。

この変りがないということ、そのこと自体、迹門における人間釈尊が、十方分身の諸仏をしたがえたる多宝如来と、多宝塔中、二仏並座することによつて、みずから久遠の本仏たる威儀を整えながら、その身そ

まゝ本門の人となり、寿量の本仏として、寿量品を中心とする本仏の自内証を、頭説するに至つたものである、ということを物語る何よりの証左、と見ることが出来ましよう。

則ち、迹門における人間釈尊の当体が、そのまゝ本門における教主釈尊の当体であり、久遠の本仏そのものであるということを、本迹両門に分かれた虚空会の中に、なお終始一貫する二仏並座の儀相によつて、うかがい知ることが出来るのです。

ところが、いさゝか法華經の教學に造詣ある人々の中には、

「二仏並座した釈尊は、もはや有限的な生命より脱した不滅の本仏であつて、決して人間釈尊ではない。釈尊といえども人間である以上、靈鷲山の地上を離れて高く虚空の中に昇ることは出来ない。虚空の中で二仏並座した釈尊は、應身釈尊ではなく、釈尊の法身であり、報身なのである」

といつたような意見が、圧倒的に多いようです。

然し、このような意見は、

一、釈尊が、はじめから本門の本仏として虚空に昇り二仏並したのではなく、迹門の迹仏として虚空に昇り二仏並したのであり、その後、その儀相のまゝ本門に入つて、はじめて本仏としての自内証を開頭したのであるということ。

二、宝塔が大地より涌出したり、人間が虚空に昇つたり、十方の諸仏が來集した……という虚空会そのもの

が、本来、象徴的な宗教文学的様式にもとづくもので

ものちあない」

あつて、これを神秘的にみたり、即物的にみてはならないということ。

三、本仏とは十方分身の諸仏（迹仏）に対する言葉であつて、この言葉があることによつて、釈尊以外に、諸仏を統一する本仏の実体がある、とみなしてはならぬということ。

四、釈尊に本迹を論するのは、その所説の教法にもとづくものであるということ。

といつたような基本的なことを失念している人々の妄見に由来するものでありましようが、甚だ遺憾に堪えなことは、「釈尊の当体こそ久遠の本仏そのものである」ということに反対するあまり、「若し、本仏釈尊が人間であるならば、我々と同じよう五臍六腑も持つていよう。五臍六腑があるならば屁をへつたり、糞もたれるだろう。そんなきたねえ釈尊を、本仏だ、本尊だといつて、おがまされて堪つた

といったような野卑な罵倒をする人々が、現にいるということです。

人間、生きている以上、食べたり、寝たり、屁もへり、糞もたれるでしよう。然し、他人の家に入り込んでまで、勝手に食堂や寝室をのぞいたり、使用中の便所の中までのぞき込むのは、馬鹿か氣狂いであり、放屁脱糞している人の姿を画くのは、エロかグロの類でしかありません。

なるほど姪祠な真言密教系の信仰においては、聖天・觀喜天という男女交合したセツクスの像をおがんでいる例もありますが、放屁脱糞している神仏の像は、さすがに古今東西、どこにもありますまい。

人間釈尊を久遠の本仏として仰ぐといつても、それには、自内証の本法をもつて常説法教化されている時点における釈尊の当体に限るのです。

その本仏釈尊と、その説かれている本法によつての

み、一切衆生の成仏も、草木国土の成仏も、はじめて可能とされるが故に、釈尊一代八十年の生涯の中でも法華經、法華經の中でも本門八品を説かれていた時の釈尊の当体を、絶対なる存在そのものとして仰ぎ、久遠の本仏そのものとして仰ぐのです。日蓮大聖人が本

釈尊に対して、敢て「教主釈尊」と仰せられた所以は、実に、こゝにあるのです。

然し、このことが理解出来ず、釈尊を有限的な人間とのみ考へて、釈尊の奥に、或は釈尊以外に、久遠の本仏をたてたり、乃至、釈尊をきたない人間と侮蔑するに至つては、法華經の真意にもとるも甚しいこと申せましよう。

何故ならば、本述兩門に亘る虚空会の、二仏並座の儀相こそ、

「法華經虚空會上」、本門八品を説法している、その時点における人間釈尊の当体こそ、久遠実成の本仏そのものである」

ということを、釈尊在世中の大衆に対し、更には末法万年、尽未来際の無量無邊なるすべての大衆に対し、その象徴的な事象をもつて、視聽覚に訴えてまでも、解りやすく納得せしめようとして、構成されたものであつたのですから……。

なお、このことに関連して大聖人は、開目録の中で旧來の諸宗教における本尊觀のあやまりを指摘される言葉として、次のように仰せられています。

法身の無始無終に説けども

応身、報身の顯本は説かれず

なるほど報身は、修行の果報として、仏身を成就したのですから、如何に仏陀としての永遠の生命を論じてみたところで、はじめて成仏したといわれる以上、所詮、有始無終であり、また応身とは八十年の生涯を送られた人間釈尊のことですから、その生命は申すまでもなく有始有終であります。

然し大聖人の、この言葉をひるがえしてみるならば

この有始有終なる心身と、有始無終なる報身に、既に無始無終なる久遠実成の仏身が、成就されているといふ事実を、開題しようとした底意をうかがうことが出来るものであり、同時に、こゝに大聖人の未曾有なる本尊觀があつた、ということが出来るのです。

では次に

「本門八品所説時の人間眾等の当体が、久遠実成の本仏そのものである」

という見方を、更に徹底させるため、この辺で、見宝塔品の中に示された二仏並座の、その儀相の起りから、ふりかえつてみるといたしましょ。

事が、多宝如来は想像することも出来ない多劫の昔既に滅度していた仏であり、同時にまたこの仏には、法華經の説かれる所には必ず出現して、その説法を聽聞し、その眞実なることを讃歎し証明するという使命が、永遠の未来にかけて托されています。

さて法華經第十章の法師品が終るや、釈尊が説法されてゐる靈鷲山の大地の中より、突如として高さ五百由旬、横と奥行き共に二百五十由旬という、地球大の大宝塔が涌出して、空中にかかります。

これが見宝塔品における第一行の書き出しであつてこの大宝塔こそ、その中に多宝如来がおられる多宝塔であり、やがて、この塔中において釈迦・多宝の二仏並座する儀相が整えられるのですが、今、仮りに、大地の地表を現在とし、地下を過去、空中を未来とするならば、この多宝塔が大地の中より涌出したといふことは、この多宝塔自体、既に過去仏の塔であることを意味しており、また空中にかゝつたということは、この宝塔の使命が未来にあることを意味している、といふように解釈もされましょ。

「多宝塔が大地より涌出した」

、ということ、それ自体には、たとえ多宝如来と多宝

塔が、法華經靈山虛空会上の說法終了し次第、みずか

ら本仏釈尊の分身者であることを示すために、釈尊の告勅によつて、十方の諸仏と共に娑婆世界を去り、東

方はるか彼方にある宝淨世界を我が仏土として、そこ

へ帰つてしまつたとしても、畢竟この大地の娑婆世界

を出生の本土とし、所詮この本土より離れて存在する

ことは出来ないものである、ということが象徴されて

いると共に、このことを通して、引いては多宝如来の

眷属である三世十方の諸仏もまた、釈尊を本仏として

釈尊より離れて存在することは不可能であるといふこ

と、並に諸仏の仏土も、娑婆世界を本土として、永劫

離れることの出来ないものであるといふことが、暗に象徴されていると思えるのです。

更に積極的にいなれば、三世十方の諸仏は方便の化仏、それらの仏土も方便の化土として、悉く教主

釈尊の方便の所説として派生したものであり、畢竟して悉く娑婆世界の教主釈尊に帰納すべき」とが、

「多宝塔の大地涌出」

という劇的事象の中に意味されている、とも言つて、とが出来ましよう。

なお、ついでのことながら、このことに関して更に

一言つけ加わるならば、三世十方の諸仏が迹門の迹

釈尊より派生し、本門の本仏釈尊に帰納するといふ

こと自体、既に人間釈尊の当体こそ久遠の本仏である

、ということを現わすものと申せましよう。

何故ならば、迹門の迹仏釈尊の当体も、本門の本仏

釈尊の当体も、当体そのものには變りはなく、釈尊以

外に本仏があつて、その本仏から諸仏が派生されたのではないのですから。

△以下次号△

謹 賀 新 年



— 本妙庵の本仏釈尊像 —

佛陀の光りが  
あなたの心に  
あなたの家に  
そしてすべての人々の上に  
輝きますように

昭和四十二年元旦

鷺峰会

代表 日高白象

# 身延三門二王尊の靈威

八その二▽

分銅志靜



法華經の結經と称される觀普賢菩薩行法經には、

な法器ともなるのである。

「夢ミラク象ノ頭ベノ上ヘニ、一人リノ金剛人有テ金剛ノ杵ヲ以テ遍ク六根ニ擬ス、六根ニ擬シナ己バ、普賢菩薩行者ノ為ニ六根清淨懺悔ノ法ヲ説カシ」

とあり、金剛力士はひとり釈尊のみならず、菩薩・諸天の御說法にも、それにさきがけ、行者の六根をきよめはらう、と説かれている。

金剛杵は古代印度の武器の一種と言われているが、それは邪惡を打ちはらうだけでなく、六根清淨の神聖

身延三門の二王尊は、金剛杵をもつていいないが、私の知つてゐる小浜キナさんといふ人は、失明のため二王門にお籠りしていたが、満願の二十一日の夜中に、

夢うつつの中に、二王尊の大きな両の手で、眼を押しあけられ、それから眼が見えるようになつた、と言つてゐる。私は、むしろ金剛杵を持つたものより、持たないものの方が、二王尊の様式としては古いのではないか、と思つてゐる。

仏教の中でも、とくに密教系では諸天、明王等いずれも杵を持ち、行僧も弘法大師像がそうであるように

五鉢などを持つので、むしろ、そうした仏器を持たない身延山の二王尊が、なおのこと、私には有難いのである。

私は身延山へ登詣すると、どんなに遅くついた時で  
も、先ず三門に詣で、六根清淨を祈り、菩提梯に向つて、只今の到着を申し上げ、それから宿坊にはいることにしている。

二王尊のみ前では、回向文に附して、つぎのような

要文をとなえる

「如來秘密神通之力、我闡大乘教度脫苦衆生、為悅衆生故現無量神力、如世尊勅當具奉行、得聞此經六根清淨、神通力故增益壽命、如那羅延堅固之身、有大筋力行步平正、遊行無畏如獅子王……」

私はいつも、ここで到着の挨拶を申し上げると、それが二王尊を通じて、全山にとりつがれるような氣

がしてならないのである。

ことに不思議でならないのは、私は身延山につけば翌日は、必ず身延山内の鬼子母神堂までのぼる。すると、お堂をまもつてゐる神原尼が、私の登山を知つていて、

「昨日の何時に身延につかれたでしょう」

と、私が三門に着いた時間言いあてる。その時刻に、神原尼の前に大きな人かげが立つ、ということである。時によつては、大きな僧形が仏前にあらわれることもある、と言つてゐる。

そんなことから、とくに感ずることは、この鬼子母神堂（昔は羅刹堂と呼ばれ、大聖人が看経されたといふ十羅刹が安置されている。今、荒行堂の祈禱本尊となつてゐる文永六年の、墨書銘のある鬼子母神像は、もとこのお堂にあつたもので、それを小田伝師が感得

して、荒行堂へうつしてまつたものである。また十一代日朝上人代に、西谷の本堂が現在地へ移転した

時、御草庵の柱でもつて、このお堂の須弥壇をつくつたと伝えられ、西谷の華堂とともに、身延山内の最古の堂宇といわれる)と三門の二王尊とは、何か深い関連があるようと思われてならない。いずれにしても、

三門は一山の縁受付であり、ここをぐらすには、仏

界にまかり出ることが出来ない、と私は信じている。

私達は、この三門で金剛力士のみ手にふれ、俗界の一切の垢穢をはらい、至心に、過去遠々の謗法の罪を懺悔しなければならない。

また行法經によると、金剛力士の片にふれ、三七の間、懺悔の法を修すると、耳も漸々に障外の声を聞き、眼も漸々に障外の事を見、鼻も漸々に障外の香をかぎ行者は六根清淨を得て、身心歡喜して、もうもろの悪想を断する、と説かれている。

ことに身延の三門では、私の知つてゐる限りでも、教え切れないほどの人々が、眼疾や発狂の、六根の苦しみから救われている。それらの靈験記を一々報告す

れば、何百枚という紙数になるかも知れない。今は、その中から真光院日秀法尼の靈験についてのべてみたい。

日秀法尼は俗名を藤沢イシと言い、生れは秋田県の六郷町である。十三才の時、得態の知れない高熱を病み、一夜にして失明の身となつた。

それから、一家あげて神仏にすがるようになり、イシさんの幼い心にも、おのずと信仰の念が、芽生えるようになつた。

十七才の春、母親に手を引かれ、大曲市の神宮寺岳の、奥岳太平山の中腹にある薬師堂に、二十一日のお籠りをした。満願の日になつたが、めしえた眼は、いつこうになおる様子もなく、母と娘は打ちひしがれて悄然と山をくだつた。

その途中で、母親は二十一日の間、使つた鍋や食器

を洗うために、娘を待たせておいて、ひとり、すぐ下の谷の清水へおりていつた。

娘は涙をながしながら、ひとり、つくねんと立つていた。そこへ、がさ／＼と、モノのゆれるような音をたて、人の近づく気配がした。話しかけて来たのは、年とつた男の声であつた。

「こいだ、いくらおがんでおつても、お前の眼はなおらんだ。甲斐の身延山へおまいりして修行すれば、必ずお前の眼はなおる。生命を捨てたつもりで、白の絹かたびらを着て、太鼓を打つて、歩いて行きなさい。

一心かけてやれば、何事も出来ないことはない。ただお前の両親は心配して身延へ行くことを許さないかも知れない。その時は、湯沢の叔母のところへ行つて相談しなさい。叔母は、必ずお前に味方して、太鼓や着るものをお、みんな用意してくれる筈である、そして、いよいよ出かける時は、叔母の家から出るようにしなさい……」

男は、やさしく。諄々と娘をさとした。娘には、それが、まるで神の声のようにひびいた。そこへ母親が引きかえして來た。

「お母さん、私を身延山へ、おまいりにやらして下さい」

「お前、何を言うのか、身延山は、どこだと思つている」

「今、そこへ來た男の人が、身延山へ行けば、必ず眼がなおる、と言つてくれた。わたくしも、そう思う。なんとか、やらして下さい」

そう言つられて、母親はあたりを見まわしたが、それらしい人影もない。これは自分の居ぬ間に、魔にとりつかれたのではないかと、母はあわてて、娘の手を引いて山をおりた。

しかし家へかえつてからも、娘は身延山へ行く、といつてきかなかつた。両親は、あくまでも反対であつた。

常識で考へても、盲目の娘が、ひとりで身延山へ行く筈がなかつた。たゞへ信仰のことは言え、娘を旅へ出すことは、みす／＼見殺しにするようなものだ。

どうしても行くなら親子の縁を切ると言つておどした

だが娘は、どうしても、あきらることが出来ず、

老人の言つたことを思い起し、叔母のところへ相談に行つた。

すると叔母は、娘の決心を、わが事のようによろこび、道中一切の支度をととのえてくれたばかりでなく

とうとう両親までくどき落してしまつた。

それから娘は、みんなにはげまされ、太鼓一つを手にもつて、叔母の家から身延山へ向つて旅立つた。

しかし盲目の身では、一日によく歩いても、二里か三里、道を踏みはずして、坂や田甫にころげ落ちることもあつた。

イシさんは当時のことをふりかえり、

「あの時は無我夢中で、太鼓を打つてお題目をとなえ

あつた。

るだけで精一杯であつた。道から足を踏みはずしてもちつとも、こわいとは思わなかつた。自分には道が見えるような気持であつた」

と語つてゐる。

しかし、盲人が、ひとり身延山まで歩いて行くといふことは、普通では考えられないことである。私は、それ自体が、すでに一つの奇蹟ではないか、と思つてゐる。それは、神仏のご守護がなければ、とうてい出来ることではないからである。

娘は故郷を出でから、約半年の歳月をかけて、甲府にたどりついた。そこから、身延まいりをする同行の仲間にはいり、旅路もいくらか楽になつた。そして無事に身延の町にはいり、ここが三門と聞かされた時は涙がとどめもなくあふれた。「一心に感謝のお題目をとなえていると、突然、男の声が聞えて來た。その声が故郷の薬師の山で聞いた、やさしい老人の声と同じで

「よく来たな、よく来た／＼」

老人は、言いようもない、いたわりの言葉で娘を迎えた。

「もう夜もおそいから、これからお前のとあるところへ連れていこう」

と言つて老人は、先になつて娘を案内した。宿坊へ

はいると、二・三の人がかけよつて、親切に娘を迎えてくれた。

だが不思議なことに、案内してくれた男の人に、お礼を言おうとしたが、そこには誰れもおらない。坊の人も、男の人はみかけなかつた、という。

イシさんの眼が開いたのは、それから三年日であつた。三年といえば、決して短い月日ではなかつたが、

イシさんは、自分の眼のなおることを信じて疑わなかつた。だから三年の修行も、決して長いとは思わなかつた。

それにしても有難いことは、盲目の娘を三年もの間

気長に面倒をみてやつた宿坊の存在である。（その宿坊の名は、またいつかの機会にお知らせしたい）そこには昔の身延山の、ほんとうのよさがある。しかし今でも、身延山の宿坊には、そうした伝統が生きのこつており、とう／＼たる俗化の波から、身延をまもつてゐる。

イシさんは、その三年の間、宿坊から一番近い三門の、二王尊へおまいりして、祈願するのがつねであつた。しかし三年の間、二度とあの不思議な老人の声を聞くことがなかつた。

ところがイシさんが、いよいよ眼を開く夜中のことである。深い眼りにおちていたイシさんは、何者かにゆりおこされた。

「起きなさい。今日は、お前の満願の日だよ。これかつた。だから三年の修行も、決して長いとは思わなかつた。

三度目に聞く、あの老人の声であつた。イシさんは飛び起きて、部屋を出た。その部屋には、イシさんの

ほかに、三人の女の人が、起居をともにしていた。しかし誰れも、イシさんの部屋を出るのに気付かなかつた。

イシさんは坂道をのぼつた。すさまじい夜風の風音にまじつて、水の流れ落する音が聞えてくる。

「そこへ坐りなさい、そして生命のあるかぎり、お題目をとなえるがよい」

老人の声は、やがて風の音にまぎれて消えた。イシさんの坐つたところは、すべくして冷たかつた。石の上のようであつた。

それからイシさんは、声のつづく限りお題目をとなえた。そして、時のすぎ去ることも忘れていた。また夜の寒さも感じなかつた。

そうしているうちに、向うから、

「藤沢さん／……」

という呼び声が聞えて來た。イシさんが何かの出来心で、川に身投げでもしたのではないかと、探しまわ

つている坊の、室の同人達の声であつた。

イシさんは、その声を聞いて、はつと、われにかえつた。その時、きら／＼と光る網の目のようなものが

渦巻となつてひろがつていつた。イツさんは、おどろいて眼をみはつた。眼の下に、水の流れが白くわきかえつて、底から、青い水渓も、ゆらめいている。そして自分の坐つているのは、川の中につき出た大きな岩の上であつた。

おそる／＼岩に手をついて、上を仰ぐと、まぶしい淡紅色の、澄み切つた空が見えた。白い雲も見える。

三人の女が、道路から川原へ、ころげるよう飛び下りて來た。

その時イシさんは、はじめて自分の眼を開いた、と感じた。夢ではなかつた。東の峰から、さんせんと太陽の光がありそそぎ、イシさんは経文のごとく六根清淨を得て、身心の歡喜に、われを忘れて御題目をとなえた。三人の女達も、奇蹟をまのあたりにして、とも

に声をふるわせて御題目をとえた。

その光明の、よみがえった日から、八十三才で亡くなるまで、イシさんの捨身の信行は、一日として止むことがなかつた。純真的感心力は、ます／＼力を加え晩年は、あたかも生ける菩薩のように、人々に愛されうやまわれた。

また不思議なことに、イシさんの眼は、その日から全く、くもることを知らず、八十三才の年まで眼鏡をかけることもなく、思いのまゝ好きな裁縫をつづけることが出来た。

また、その眼は、天眼のように、神靈の世界にも、まじわることが出来たのである。そしてイシさんは、その信力・通力をもつて、多くの人々を救うことが出来た。

今は、そのなかから、私にとつても、もつとも身近かなイシさんの信行の一端をつたえたい。

「これは、内科のお医者さんで、なおる病氣ではあり

と涙声になつて、うつたえた。イシさんは、その病人の部屋に案内してもらつた。九ツになる、まだ、いたいけな少年が、苦痛を訴えて、泣きわめいている。

ある時、イシさんは、鬼子母神様のお札をとどけるために、六郷町の大きな地主の家へ出かけた。

すると、その門の中に、不気味な靈の渦巻が、眼にうつつた。それは、普通の人眼にはうつらない龍神のさわりを受けた、重病人のいることを察知した。

玄関に立ち、女主人にお札をわたしたが、イシさんはその病人が気がかりでならない。

「お宅で、どなたか、病気の方はございませんか」と、たずねると、女主人はびっくりして、

「実は長男が気管支炎にかかり、三人のお医者さんにみてもらつてゐるが、ます／＼容態が悪くなるばかりだ」

ません。このお子さんは、足が悪いのです。早く外科の  
お医者さんに見せて下さい」

その足には、蛇の靈が、まといついていた。イシさん  
の眼には、それがはつきりと見える。しかし、その  
日は、はじめての家のことでもあり、イシさんは、あ  
まり多くを語らずに、家へかえった。

しかし、その少年の母は、非常に信心深い人であつ  
たので、イシさんの言葉通りに、すぐに外科の医師を  
よんで、診断してもらつた。すると、イシさんの言つ  
たように、高熱の原因は、足の肉ばなれにあつた。し  
かも化膿はじめているので、一刻も猶予ならない状  
態であつた。

少年は、学校の御真影の、奉安所の石壇から飛び下  
り、その時、足を痛めたのであつた。内科の医師達は  
それには気付かず、もつぼら気管支炎の手当ばかりし  
ていた。

少年は外科の医師のすすめで、すぐ秋田市の、秋田

病院に入院することになつた。そのことを聞いたイシ  
さんは、汽車にゆられながら、秋田市の病院まで見舞  
に行つた。

ところが病院では、手遅れのため、近く大腿骨切断  
の大手術を行うということで、一家は悲歎の底に沈ん  
でいた。ことに少年の母は、もう何日も眠つておらず  
眼はくぼみ、頬はこけ、見るもあわれなほど憔悴して  
いた。

イシさんは、どうにかして、この少年と母親を助け  
てやりたい、と思つた。

潮のみちひぬ事はありとも

日は西より出るとも

法華經の行者の

祈りのかなわぬ事はあるべからず

この大聖人のお言葉にはげまされ、イシさんは、明  
日の朝の六時まで、一晩母親にかわつて、看病するこ  
とを願い出た。母親は心よく、それを聞きいってくれ

たが、自分では、どうしても身体を横にしようとした  
なかつた。

イシさんは、少年のベットの、すその方に坐つて、  
約十二時間、ただ一心に深い祈念のなかにはいつた。

そして、ついにイシさんの至誠は天に通じ、朝明けと  
ともに、執拗な惡靈も退散した。

「奇蹟がおきて、この足は切らずにすみますよ。そし  
て二週間もすれば、退院出来るようになります」

イシさんは確信をもつて、そう言い切ることが出来た  
玄関までイシさんを送つた母親は、そう言われても、

にわかに、それを信じる気持になれなかつた。

十二月十九日、やはり手術は避けられなかつた。父

親は銀行の決算期で、手術には、どうしても立ち合つ  
ことが出来なかつた。結局、母親と、出入りの爺さん  
の二人が、手術室にはいることになつた。

ガーゼの手術着に、身をつんだ三人の医師が、腕

を組みながら、何か打ち合せている。準備に余念のな

い看護婦の顔も、異様にこわばつてゐる。患部は膝の  
ちょうど裏がわになつてゐる。医師が、そのガーゼを  
とると、白い膿が、どろりと流れた。ウミは腰盆で一  
つになつた。

「不思議だね、ウミがすつかりとれちやつた。これは  
奇蹟の足だよ、一寸このまゝ様子をみた方がいいね」

手術は急に中止となり、少年と母親は、おそろしい  
切断器の下から無事に病室にもどされた。そしてイシ  
さんが予言したように、少年は二週間目に退院をゆる  
されて、町へかえつた。

その少年こそ、今、秋田市で名外科医として、綜合

病院を經營してゐる土崎本山町の五十嵐博氏である。

この五十嵐家は県南切つての名家であり、代々淨土宗  
の檀頭をつとめている家柄であるが、博氏は、この奇  
蹟によつて一命を救われてから、イシさんや母親の感  
化により、熱烈な法華信仰に生きるようになつた。

博氏は、これまで何万人という人の、切開手術にあ

たつてゐるが、メスを手にする時は、必ずお題目を二篇となれる。そして、いまだかつて手術台の上で、人を死なせたことがない、と言つてゐる。

また博氏は、人工心臓を用いずに、人体を氷で冷却しながら、心臓を人体の中で、切開手術する方法をこころみ、これまで百パーセントの成功率を示してゐる。昨年の一月十四日の秋田魁新報は、このことを大々的にとりあげ、個人経営の病院で、心臓手術に、このようないい成績をあげているところは他に例がない、と博氏の功績を高く評価している。

一方、博氏は、寸暇もない病院経営や、執刀のかたわら、大聖人の御遺文集と取り組み、朝夕は必ず大聖人の御尊像の前に坐り、病院にも、なりひびくような大音声で、読經三昧に入る。

博氏は、よく冗談をとばし、

「命のある限り、お題目をとなえるがよい」

と言われてから、イシさんは八十三才の死の際までその言葉を忘れることがなかつた。しかし不思議なことに老人は、その言葉を最後に、二度とイシさんの前にならわれなかつた。イシさんは生前、その人を、身

に清静の香の匂いがただよい、大聖人の御尊像を拝みに来る同信の人々が、絶えないのである。  
また博氏は、病院からほど近い、秋田城趾の中にあらわれなかつた。イシさんは生前、その人を、身延三門の二王尊の、変化の人として深く信じ、二王尊には、生ける人に仕えるように、敬虔そのものであつ

た。

また最後に附言したいことは、イシさんは生涯無欲にして、決して信者などに、金品を求めるようなことをしなかつた。布施さえも受けつけなかつた。信者達は止むなく、イシさんを時々家へ呼んで、御飯をあげるのが関の山で、それが唯一の布施でもあつた。イシさんは八十三才まで針をもち、それからはいる収入を生活の支えとしていた。

このイシさんの行績については、また後で、あることもあるかと思うので、今は、これくらいにして、私の父が住持している南秋田郡五城目町宗延寺の開基羽立山（はだちやま）の眼清浄の奇蹟についてのべてみよう。

強気の羽立山は、それにも屈せず、はるばる身延山に参詣し、そのまま身延にふみとどまり、修行三年目に奇蹟の開眼をはたした。日秀法尼も参籠三年目に光明をとりもどし、彼此ともに、符節を同じくしていることは、不思議なことである。

当山の開創は、承応三年になつてゐるが、番神堂はそれよりも早く、木彫の三十番神の、木像の台座には

慶長九年三月二十六日と墨書きされている。この三十番神と、それに附隨した二王尊二体の像は、いずれも開基の羽立山が、身延山で彫刻し、時の貢主、心性院日遠上人から御開眼を受け、今の八郎潟町羽立の実家に持ちかえつたものである。

この羽立山は、当山の現總代である須田家の先祖であり、話によれば、須田家に入婿した人だという。羽立山というのは角力のシコ名であり、當時、出羽国では名の聞えた力士であつた。ある時、角力のうらみから、朋党にはかられ、両眼に目つぶしを食い、あたら盲目の身となつた。

羽立山は、その報恩のため、身延の山から靈木を運

んで、赤誠をかたむけて、三十番神像と二王尊像をさざんだのである。

彫刻はもとより素人であり、上手とはいえない。しかし魂のこもつた純真の造形には、何か人の心を打つものがある。一体一体に、開眼の無限のよろこびが波打つおり、素朴初心の妙は、いかなる名工といえども及びえないものがあろう。

羽立山は、その御尊像を背負つて、意氣揚々と帰郷今は法華經の行者として恩讐を越え、唱題三昧の日をおくつた。その後、羽立山は御神示により、当寺の現在地である鶴ノ木の森を淨地と定め、そこに番神堂を建立したのである。恐らくそれは、身延山で御開眼を受けた慶長九年から、そう遠くはないと思う。

その番神堂建立のために、森の地ならしをしている時、羽立山の歎先に、ワラジのような恰好をした、平べつたい蛤色の石があらわれ、音を発して二つに割れそこから白龍神が霧雲をまいて昇天した、とつたえら

れている。その聞いた二枚の石には、龍の化石のあとがあり、当山は七面龍石と称して、番神の御神殿の中に、一緒に合祀している。

この羽立山が、身延山のどこに籠つて修行したかは知るよしもないが、三十番神とともに二王尊を刻んだことを思えば、その開眼の奇蹟をうるにあたつては、身延二王尊の御加護をこうむつたのではないかと思う。それに羽立山は力士でもあり、金剛力士に対する尊信も、きわめて深いものがあつたであろう。このような開基羽立山の一大事因縁が、今日再びめぐり来つて、私を身延三門へと引きとらえるのであろうか。△完△

今回も、私ののべようとしたことのなればにも達しなかつた。許されば、いつかの機会に、またこの後をつづけてみたいと思う。

# 唱題の心得とは

解説 白高象

おたずね

講義によれば、

「阿仏房さながら宝塔、宝塔さな  
がら阿仏房」

「阿仏房さながら宝塔、宝塔さな  
がら阿仏房」

お題目を唱える心がけとして、  
「自分の唱えるお題目の声を、自  
分の耳で聞き、自分の口より吐き  
出したお題目の息を、再び自分の  
鼻より入れて、下腹まで吸い込む  
ようにせよ。これを繰り返す中、  
自分自身が何時の間にか、お題目  
そのものとなり切つた唱題三昧の  
境、靈山虚空会に浮いているよ  
うな境地に入ることが出来る。こ  
の境地を成仏の境、八阿仏房さな  
がら宝塔、宝塔さながら阿仏房」  
といふのである」と教えられたことがあります。

然し、本誌第四卷九月号の自我偶

という思想は、日蓮大聖人御自  
身の教えにもとづくものではなく  
大聖人滅後における後世の、あや  
まつた門人によつて偽作された、  
「真言ずわりの中古天台思想」で  
ある、と指摘糾弾されています。  
若し、それがそのように、あや  
まつたものであるならば、その唱  
題の心がけも、あやまつたものと  
申されましよう。

では、唱題の心がけとして、ど  
のようなことが最も正しいもので  
しょうか。

## おこたえ

日蓮大聖人以来、宗門の布教限  
目であつた國家諫曉が、幕府によ  
つて禁止されたため、これに代つ  
て加持祈福が、布教の中心となつ  
て来るや、宗門の真言化は、にわ  
かに加速度を増し、遂には唱題行  
そのものにも、低俗な呪詛的色彩  
が充満するようになつて来ました  
そこで、その弊風を是正するた  
め、導的な唱題行が興つて来まし  
た。然し禪宗の形態そのものは、  
実は律宗の様式の脱化したもので  
あり、その思想も真言の阿字不生  
種的唱題行は低俗な呪詛的域より  
く、懲悔なきところに教説の起り

まぬがれて、理知的なスマートな  
ものとなつたとはいゝ、その形態  
は禪律の域より出るものではなく  
その思想も、真言思想の範疇より  
脱するものではありませんでした  
たとえば、自分の唱えたお題目  
を自分の耳に聞くとか、自分の口  
より吐いた息を、再び鼻より入れ  
て下腹部まで吸い込むとか、禪の  
数息観や臍下脇田の腹式呼吸法と  
いうもので唱題行をしてみても、  
所詮「阿仏房さながら宝塔、宝塔  
さながら阿仏房」という増上慢な  
己身本尊に堕ち入つてゐるのです  
そこには、自己本位な概念觀法

うるはずはありません。救いのな  
い信仰は必要のないものです。  
蓋し懲悔ということは、実在す  
る本仏釈尊の前に、自分自身の因  
果の罪業をさらけ出し、因果不二  
なる本仏のお題目の中に攝取され  
ることです。

従つて法華經の信仰は、自分自  
身の中に法華經を取り入れて、こ  
れを把握し体得しようとするもの  
ではなく、むしろ自分自身をお題  
目の中へ投げ入れて、本仏の大慈  
悲によつて導かれるにまかせきる  
ということであり、そこに法華經  
の体得があると申せましょう。  
道元禪師も次のように諒めていま  
す。

自己をはこびて

万法を修するを迷とす

万法すゝみて

自口を擡するは憤りなれ

は、我々の方から仏の方へ登つて行くという「従因至果の法門」によるものではなく、むしろ仏の方から我々の方へ降りて来るという「従果向因の法門」による、と申

本仏釈尊の唱えられている因行果徳（因果不二）のお題目の声に、あたかも鐵の磁石にすいつけられるが如く、身も心も投げ入れて、但信口唱するということです。

されています。

その唱題修行ということを、

的にいうならば本仏教尊みずから唱えていたのであります。

すべての人々よ すべての人間

悉く妙法五字のお題目の中に、既に攝取され解決されている。だか

らすべての人々よ、お題目を唱えよ。私が唱えてするよう、私と共に唱えよう」

と、常にお題目をもつて私達に呼びかけている大慈悲心を感じて本仏釈尊の唱えられている因行果徳（因果不二）のお題目の声に、あたかも鉄の磁石にすいつけられるが如く、身も心も投げ入れて、但信口唱するということです。

蓋し、本仏の仏国土においては本仏釈尊が、たゞ一人、お題目を唱えているのではありません。

そこには本仏釈尊を中心として多宝如来をはじめとする三世十方の諸仏、並にその眷属である迹化の菩薩団、わけても本仏釈尊の本

眷属である六万恒河沙の本化地涌大菩薩団・そして梵天・帝釈・鬼子母神・十羅刹女・八大龍王・日の天・月天・等々の法華經擁護の諸天善神が、三千大千世界の虛空にもあふれるばかりに围绕（いによう）して、本仏釈尊のお題目に唱和しており、その音声は、諸天鼓天鼓の音響と共に、法界に轟くのです。

想像しても御覧なさい。鬼子母

神、十羅刹女、等々の法華經撰註

の諸天善神は、その因位の行相を

すさまじく、凡夫の心魂も畏怖せしめるばかりの大音声をはりあげてお題目を唱えており、大聖人は

鳥と虫とは鳴けども涙おらず

日蓮は泣かねども涙ひまなし

といふ大慈悲心と、

我れ日本の柱とならん

我れ日本の眼目とならん

我れ日本の大船とならん

という大誓願よりほどばしる重

厚、壯重なるお題目を唱えつけ

られ、三世の諸仏は十方より来集

して、その唱題の中に、

「諸仏自在神通の力」

「諸仏獅子導迅の力」

「諸仏威猛大勢の力」

という、すべて顕發しており、

かかる大マンダラ仏国土に響き渡

る擊鼓唱題の大コーラスの中には

その中心部より、大慈きわみなき

静かな、深い、そして温く、大ら

かな、本仏教尊みずから唱えられ

るお題目の声が、

如來の一切の所有の法

如來の一切の自在の神力

如來の一切の秘要の藏

如來の一切の甚深の事

如來の一切の顕現し尽

して、ひとりわ透き徹るように流

れているのです。

豪華、絢爛たる、そして莊嚴き

わみなき本仏教尊の大マンダラ淨

仏国土、その宇宙大の大絵巻の中

に、常に轟き、或は静かに流れて

いる擊鼓唱題の大コーラス、それ

は人智を傾むけた如何なるシンフ

オニーよりも、遙かに神々しく庄

懇切であり、ひとたびもその音響

にふれ、その堪端の中に入るなら

ば、誰れびとたりとも、みずから

なくなることでしょう。

そこで考えてみましょう。この

ような状態にあつて、自分の唱え

たお題目の声を、耳をすませて聞

くとか、吐き出した息を吐まで吸

い込むとか、そういう観念觀法が

果して出来るかどうか、というこ

とを……。

もう答えは、はつきりしていま

す。こうした觀念觀法は、かかる

仏国土の実際を知らない者の稚戯

にも等しいことなのです。

そうです。この時、聞えるもの

は、もはや自分の唱題の声ではなく、耳を聾し、心魂を奪い、一切

の罪業までも攝取する大マンダラ

仏国土の大音響であり、自分の胸

に入る息とは、もはや自分の息で

はなく、四方八方より迫り来る仏  
国土の神氣でありましょう。

既に、こゝにおいては自己を本位とする観念觀法も精神修養も、ふつ飛んでしまい、五体を地に投するほかはありません。

およそ感応なき宗教はありませんが、法華經における感応とは、

法華經の中に自我の命をして、法

華經によって生かされた新生の命を得ることです。「一心欲見仏不

自信身命」とは、則ちこのことで  
はないでしょうか。

「若し、或る人が、

「あなたは、何故、太鼓をうつて

お題目を唱えるのか」

と尋ねるならば、私は即座に次

のように答えましよう。

「今こゝに本仏釈尊が、日蓮大聖人が、そして三千大千世界にもあふれる諸大菩薩が、私をみつめながら、私に向つて、私のために、

一齊に、太鼓をうちながらお題目

を唱えてくれているからです」

また次のようにも答えましよう

「法華經を知らないために、自分

の因縁と惡鬼惡靈に悩まされてい

る人々が、世の中には余りにも多

く充ち溢れおり、それらの人々すべてのためにも三宝諸天は、変らぬ慈悲をそゝぎ、昼夜にお題目を唱えられているからです」

また次のようにも答えましよう

「私の先祖の靈が、私を導き私を助けてくれた恩人たちの靈が、そして戦争や事故で亡くなつた人々の靈が、総じては六道に輪廻している有縁無縁の精靈が、私に向つて、お題目を唱えて下さい、と頼んでいるからです」

そして或る人が、

「あなたは、どのように心がけてお題目を唱えているのか」

と尋ねるならば、私は、はつきりと答えましよう。

「三宝諸天が唱えているように、唱えるほかはありません」と。

謹みて新春を慶賀し

共に正法広布の花を咲かせましょう

## 鷲峰贊助会



東京都板橋区仲町 頸照寺

伊庭顕照

東京都北区西原町

有賀義雄

東京都大田区池上本門町池上学寮

和田龍昌

東京都中央区月島

東京都江東区深川白河町大成KK

同右

野崎康充

川島海嗣

中田穆彦

同右

松谷ゆみ

東京都練馬区栄町

東京都渋谷区本町

東京都世田谷区代田町

大貫秋元庸吉

小宮大貫

東京都中央区入船町

東京都世田谷区玉川上野毛

中山はま

東京都昭島市宮沢町

大塚トミ子

東京都小平市小川西町

中原勝

川島一元

三木君江

井田ミチ

東京都世田谷区北沢

日 高 江里子

千葉県船橋市葛飾町

石井 重吉

山梨県身延町東谷 尾張屋

横浜市南区大岡町

田 中 資郎

市川市平田町 聖徳太子堂

中 島 康 恵

甲府市朝日町

横浜市南区井土ヶ谷仲町大乗物産

猪瀬 秀成

市川市真間町 弘法寺内

木 村 義 賢

長野県駒ヶ根市赤穂町 大法寺

横浜市戸塚区戸塚町横浜電機

中 盛 直 保

同 右

川 島 本 良

静岡県富士宮市青木

横浜市港北区菊名町

新 川 祥 司

鎌子市本町

広 野 稔 彦

富士宮市宮本町

横浜市戸塚区上矢部町

小 池 房 三

山梨県増穂町青柳

土 星 貢

名古屋市東区小川町 本住寺

神奈川県愛甲郡愛川町

三 好 勇

山梨県身延町甲斐大島 妙泉寺

近 貴 龍

名古屋市熱田区田中町 本遠寺

逗子市久本町 涌唱会逗子道場

高 城 光 子

山梨県身延町波木井 本妙庵

日 高 白 象

愛知県海部郡七宝村 瑞円寺

佐々木 友 学

名古屋市豊田本町 万行寺

浜 島 法 立

名古屋市熱田区沢上町

奈良県宇陀郡大宇陀町

名古屋市西区弁天町 宝塔寺

安 井 隆 礼

阿知羅 一郎

豊橋市錦町 大法寺

鈴 木 鈴 一

大和郡山市小泉

伊 藤 惠 祥

酒 井 友 子

同 右

名古屋市港区小碓町 妙光寺

京都市伏見区深草 瑞光寺

大和郡山市東奈良口

石 橋 卓 定

川 口 智 明

藤 本 晃 良

名古屋市西区志摩町

福知山市城山区猪崎 鬼子母神堂

岐阜県土岐市土岐津 一休画付社

中 野 妙 修

沢 田 党 象

小 島 休 一

安城市今村町

福知山市石原

和歌山市和歌浦南津屋

名古屋市中村区東柳町

奈良県桜井市中央通り 妙要寺

三重県四日市市富田 妙延寺

松 谷 英 生

大 橋 喜 作

花 房 穀

名古屋市南区又兵衛町

奈良県宇陀郡大宇陀町 妙徳寺

和歌山市和歌浦南津屋

野 田 政 市

奈良県桜井市中央通り 妙要寺

三重県四日市市富田 妙延寺

藤 原 祥 哉

奈良県宇陀郡大宇陀町 妙徳寺

和歌山市和歌浦南津屋

高 桑 鋼 次

奈良県宇陀郡大宇陀町 妙徳寺

和歌山市和歌浦南津屋

和歌山市和歌浦南津屋

奈良県宇陀郡大宇陀町 妙徳寺

和歌山市和歌浦南津屋

大阪府布施市夢屋西 宝樹寺

和田龍遵

大阪市福島区下福島

中西吉三郎

川西市小花宗近

岡秀藏

大阪市南区谷町 妙經寺

西川友義

兵庫県宝塚市切畑 安國寺

川添順教

兵庫県揖保郡新宮町 寺田健二

大阪市生野区舍利寺町 法見寺

高木龍修

兵庫県尼崎市道意町 妙隆教会

辰巳妙隆

福井県大野市新町 石川くめ

大阪市西成区玉出本通り 岡本組

岡本よし恵

西宮市津門室津町 堤内

昌子

広島市山根町 寿老園 武村浩司

大阪府河内市若江南 蓮城寺

蓮城寺青年会

西宮市笠屋町

長宗良子

広島市鏡音本町

内田淳子

北九州市門司区庄司町 大雄寺

大阪府八尾市服部川 安国寺

日當

神戸市生田区元町

昌子

福岡県北九州市八幡区祇園童潛寺

大阪市阿倍野区文里 明淨学院

南

掛川市末広町

定一

北九州市門司区庄司町 大雄寺

赤阪日孝

服部順一

松尾周輝

北九州市門司区庄司町 大雄寺

大阪市西区立堺堺北通 宮本商会

宮本龍一

童野市童野町富永

千代

福岡県田川郡香春町 蓮華寺

松代義円

## 鷺峰賛助会員とは

福岡市浪人町

藤田 恵久

久留米市白山町

井上 イツノ

筑後市和泉

古賀 みゆき

北九州市松杉区浜

津山 ツル

熊本市池田町新屋敷 崇心教会

小寺 崇元

以上これまでの賛助会員御芳名

△順序不同、敬称略△

一層の御支援をお願いする次第です。

△鷺峰会△

鷺峰賛助会員とは、本誌を発行したり全国各地に街頭布教を展開する鷺峰会青年運動に対して、毎年、年間三千円の資金を志納することによつて、この運動に参加し、運動の経済的原動力となる人々のことです。若しこの参加がなかつたならば、学生僧だけでは過去四年間、宗門に新風を巻き起すほどの運動は出来なかつたことでしょう。一人でも多くの方々が、この運動に参加し、広宣流布の喜びをわかちあうようにいたしましよう。

# 編集後記

鷺峰 正月号

昭和四十二年 第五卷 第一通卷 第三十二号

定価 五十円 送料 二十五円

昭和四十二年正月五日 印刷  
昭和四十二年正月十日 発行

編集兼発行人

山梨県身延町波木井三区配信課本妙庵

日高白象

印刷所 山梨県身延町波木井三区配信課本妙庵

藤田印刷所

發行事務所

山梨県身延町波木井三区四一二二五

鷺峰

会

電話(身延山)四五九番  
振替(甲府)二〇九三番

★鷺峰会は昭和三十八年発足以来、今まで五年目を迎えた。本誌も五才になつたわけです★子供を生み育てる親の苦勞は並大抵のことではありませんが、これまで本誌が途中しばしく欠刊しながらも、とにかく五才にまでなれたことについては、ひとえに賛助会員の方々、読者皆様の絶大なる御理解と御援助のたまものと、まことに感謝に堪えないところです。

★本会は創立以來、本誌発行と共に、各地に街頭布教を展開して来ましたが、この間、鷺峰会の学生僧も正大学、身延山大学高校において色々育つて来ましたやがて彼等青年僧は一丸となつて、日本国内外に申すに及ばず、遠く海外にまで挙旗宣傳し、他者の悲願を果して行くことでしょう★年頭に当り、皆様の御多幸と御發展を、心からお祈りすると共に、本誌に対する一層の御指導・御支援をお願いする次第です。

昭和四十二年元旦

白象

誌代	半年分	一年分
賛助会費	四五〇円 (送料共) 九〇〇円 (送料共)	三〇〇〇円 (分納可)